

番号	コード						名称	所在地	年代		由緒由来の概要	資料名
	町名	有形・無形	現存・非現存	大分類	中分類	和暦			西暦			
360	99 広域	2 無形	1 現存	1 産業	1 農業	日高の馬産	—	—	—	もともと北海道に馬は存在せず、松前藩の統治時代に和種馬が導入される。寛政元(1789)、馬は船で室蘭に送られ、様似までの運搬に使われた。夏期間、漁業などに利用されたが、冬季には置き去りにされ野生化し、主に道南の寡雪地帯で生息するようになり、翌年、こうした野生馬を集めて使役した。また、寛政11(1797)に東北北海道が幕府の直轄地になり、南部から購入した馬60頭が各会所に配置され、文化5(1808)には日高7場所に194頭、うち新冠には40頭が配置された。明治期の開拓史の設置により駅通馬や農耕用馬の需要が高まったが、ホーレス・ケブロンらの指導のもとにアメリカ型農業を施行したため、和種馬は農耕用に不向きとされ、馬体改良等のため新冠御料牧場、日高種畜牧場が設置されたことにより日高地方が馬産の主産地となる先立ちとなった。明治15(1882)からは、軍馬の育成にもあたるようになった。	続新冠町史、日高のあゆみ	
361	99 広域	2 無形	1 現存	1 産業	1 農業	八王子千人同心	—	寛政11	1799	寛政11(1799)、幕府は蝦夷地警備を強化するため、津軽藩500名強を沙流以東、南部藩500名を浦河以東の警備に当てたが、このとき農業に従事しながら警備にあたることを申し出たのが武州八王子千人同心頭、原半左衛門で、これが屯田兵の第1歩といわれる。	我が祖山田文右衛門	
362	99 広域	2 無形	1 現存	1 産業	1 農業	日高の電気	—	—	—	昭和のはじめごろ、日高には日高電気株式会社と沙流電気株式会社が存在していたが、両社ともガス力発電で電灯のみを供給する小規模なもので、業績不振に陥っていた。その経営建て直しを行ったのが、昭和3(1928)に、当時、日高電気株式会社を建て直すために東京から専務取締役と就任した手塚信吉(後の日本電工株式会社創設者)他で、社名を「日高電灯株式会社」として一本建てとした。以来、昭和4(1929)には、勇弘電灯株式会社と提携して、千歳～浦河間約200kmの長距離送電と配電線路が完成し、王子製紙千歳水力発電所から歴史的送電を開始した。また、昭和6(1931)には、様似～幌泉(えりも)間28kmの配電線路が完成し、送電が開始された。その後、電力需要の拡大から幌満川水力電源開発が計画され、昭和9(1934)に幌満川水力電気株式会社が新設され、昭和10(1935)に第1発電所が建設された。昭和13(1938)には北海道電気興行株式会社に改称され、昭和15(1940)に第2発電所が完成し、さらに戦後の電力不足を改称するため、昭和29(1954)に第3発電所が建設された。		
363	99 広域	2 無形	1 現存	1 産業	3 水産業	日高のサケ	—	—	—	江戸時代におけるサケ漁業は河川が主体で、沿海で漁獲するようになったのは建網漁業が発達した文化(1804)の頃からである。サケは往時のアイヌ民族にとって冬期間の主要な食糧であり、シエベ(最高の食物)又はカムイチエツプ(神の魚)と呼ばれた。和人と交易する場合の重要な提供品ともなっており、サケ漁の豊凶はアイヌの生活を左右するほど依存度が高かった。しかし、当時、凶漁はほとんど希で、毎年多くのサケが川を遡り、川中に棒を立てても倒れなかったと言われる。アイヌの人へはたたき棒やヤスなどを使って自家用のサケを捕っており、漁業として発達したのは和人によるもので、寛文から享保(1661～1735)にかけて曳き網漁が始められ、また、場所請負人が大きな役割を果たしていった。これによって、サケ漁業の主導権は和人に掌握され、寛文9(1669)のシャクシャインの戦いを誘導した間接的原因となったといわれている。	日高のあゆみ	
364	99 広域	2 無形	1 現存	1 産業	3 水産業	三石昆布	—	—	—	日高沿岸の昆布を「みつし昆布」と総称し、明治以前は「本昆布」と呼ばれた。三石郡を起源とするが、浦河・様似にも同種のものを生産するので古来三場所といわれ、十勝広尾から日高静内までが一区域として分布し、えりも岬周辺が最も広く繁茂している。寛文3(1791)には、14,500駄(約435,000kg)を生産し、北海道総生産額の半分以上に達していたといわれる。昆布業は、前松前藩政期の安永期(1772～1780)以降からめざましい発達を遂げ、文政元(1818)、南部の人、若狭庄兵衛が三石漁業所の請負人となり、昆布を集荷し三石昆布と名付けたと言われる。また、元来、日高沿海は底質岩石に乏しく昆布の繁殖が希であったが、万延元(1860)、沙流場所請負人山田文右衛門が、近山から岩石100個を切り出し、1個ごとに縄をつけ海に投じて見たところ、昆布が繁茂することがわかり、以後各地で昆布投石を行い収穫が激増した。しかし、特に清国貿易が行われるようになると和人が競って粗製乱造の昆布を輸出したので信用を失い、不振を極めたが、大正7(1918)に三石町の幌村運八が札幌市で開催された「開道50周年記念博覧会」に長切昆布を出品し、きわめて優秀と認められて入賞し、宮内省の買上ともなったことで、「三石昆布」の名声を盛り返し、全国的に有名にして価格が安定するようになった。	三石町開基百年記念誌、日高のあゆみ、三石町史	
365	99 広域	2 無形	1 現存	1 産業	5 工・鉱業	日高の砂金	—	寛永10	1633	寛永10(1633)金山奉行がおかれて、静内町シベチャリ川、沙流郡ケノマイ川から砂金が採取されはじめ、寛永12(1635)には、様似町連別(現在の西様似海辺川)に東金山鉱山が幕府によって開かれ、以後寛文9(1669)まで35年間に渡った。当時の採金は夏季に限られて、鉱夫は諸国から来て一定の運上金を納めて採取した。約1人1日で1匁(3.75g)を採取しており、いかに多くの砂金があったかが想像される。寛文9(1669)頃の砂金坑首四郎などは、配下に鉱夫300余人を率い、1ヶ月の採金量9貫匁(33.75kg)余りに達したというが、この砂金採取は、川底を掘りとり、アイヌのイオル(漁獵場)を次々と破壊したといわれる。東金山鉱山は寛文9(1669)のシャクシャインの戦い以後、坑口が隠されてしまい、また、松前藩が鉱夫が東蝦夷地に入るのを禁じたので急速に衰えた。	増補改訂静内町史下巻、浦河町史下巻、アイヌ差別問題読本	
366	99 広域	1 有形	2 非現存	1 産業	6 鉄道	沙流軌道	平取～門別町富川	大正10	1921	王子製紙株式会社が原料木材輸送のために軌道を敷設して運行したものの、日高線富川駅から分かれ、紫雲古津、去場、荷葉を経て平取に達する延長13kmの軌道で、その後、一般営業線となり、旅客、貨物を取り扱うようになった。昭和20(1945)に貨物自動車の増加などにより廃止された。	平取町史	
367	99 広域	1 有形	2 非現存	1 産業	6 鉄道	苫小牧軽便鉄道	苫小牧～門別町富川	明治42	1909	三井物産株式会社が苫小牧から鶴川間27.5kmに専用の馬車鉄道を敷設し、木材を輸送したのが始まり。明治43(1910)に、三井物産と王子製紙が合資で蒸気機関車を走らせ、明治44(1911)には鶴川から門別村佐瑠太(現在の富川)まで12.9kmを延長して、鶴川や沙流川上流から刈りだされる原木を運搬する森林軌道とした。大正2(1913)から王子製紙を主体とした苫小牧軽便鉄道株式会社として、従来の木材輸送に加えて一般運輸営業を開始した。	改訂様似町史、新門別町史中巻	
368	99 広域	1 有形	2 非現存	1 産業	6 鉄道	日高拓殖鉄道	門別町富川～静内	大正12	1923	日高拓殖手手有働株式会社が設立され、佐瑠太(富川)から日高沿岸を東に向かって鉄道を延長し、大正13(1924)には門別村内横断し、佐瑠太・厚賀間が開通した。大正15(1926)には、厚賀から静内までが開通し、続いて浦河までの延長が計画されていた。	改訂様似町史、新門別町史中巻	

番号	コード						名称	所在地	年代		由緒由来の概要	資料名				
	町名	有形・無形	現存・非現存	大分類	中分類	和暦			西暦							
369	99	広域	1	有形	2	非現存	1	産業	6	鉄道	北海道鉱業鉄道	舘川町沼ノ端～金山	大正7	1918	舘川流域の10数鉱区の石炭やその他鉱産物の開発のため設立されたもの。大正11(1922)には沼ノ端～生蔵間、大正12(1923)には生蔵～辺富内間の営業を開始した。大正13(1924)に北海道鉄道(株)と改めて一般客貨輸送を始める。昭和4(1929)には、昭和鉄道疑獄により役員らが退陣し、その後、持株を肩代わりした王子製紙が経営する。	日高町史
370	99	広域	1	有形	2	非現存	1	産業	6	鉄道	三井軌道(ウンベの軌道)	浦河町上杵臼～様似町西様似	昭和6	1931	三井物産(株)木材部が様似に駐在所を構え、日高の森林開発に乗り出し、上杵臼の木材を搬出するために設置した約30kmのトンネル2つを含む森林鉄道で、ドイツから輸入した60馬力のディーゼル機関車と90馬力のガソリン機関車を使用した。昭和12(1937)には、様似西町海岸まで開通し、そこから船積みして本州方面に海上輸送した。軌道輸送も船積み作業も昼夜兼行で行われたので、当時の西町の賑わいは、様似の隆盛期を意味するものであった。しかし、昭和16(1941)には、木材生産量の減少に伴いディーゼル機関車は国に買い取られ、軌道、ガソリン機関車などは軍に徴発された。戦後、撤去されトンネルはふさがれた。	浦河百話、ウンベの軌道物語、様似町郷土館
371	99	広域	2	無形	1	現存	1	産業	6	鉄道	日高線	—	昭和2	1927	明治から大正にかけて、政府では新規鉄道の敷設と既設鉄道の買収による国有鉄道の整備を急いでおり、昭和2(1927)に苫小牧軽便鉄道と日高拓殖鉄道が政府に買収され国有鉄道となった。昭和4(1929)に苫小牧から富川間、昭和6(1931)に富川から静内間の軌幅拡張工事が竣工し、木材を除くほとんどの生産物の輸送は鉄道によることとなり海上輸送が衰える原因となった。昭和8(1933)に浦河から様似までの延長が決定し、同年に三石まで、昭和10(1935)に浦河まで、昭和12(1937)に様似まで延び、現在の日高本線、全長146kmが全線開通する。昭和62(1987)に、日本国有鉄道が7つに分割民営化され、北海道鉄道総局管内は北海道旅客鉄道株式会社(JR北海道)となり、日高本線は鉄道事業本部の下に日高線運輸営業所が苫小牧市に置かれ管理運行されることとなった。なお、日高管内には、日高線のほかに、以前は富内線があり、昭和33(1958)には、舘川町富内から平取町振内まで、昭和39(1964)には日高町までの全線が開通したが、昭和61(1986)に廃止された。	改訂様似町史、新門別町史中巻、北海道新聞社HP
372	99	広域	1	有形	1	現存	1	産業	7	道路	佐留太・金山間道路	佐留太～金山	明治42	1909	佐留太から沙流川沿岸を廻り、平取、ウシャップ(日高町)、占冠、金山、金山に至る道路。明治5(1872)にはすでに踏査されていた本道内陸の主要道路の一つであった。明治45(1912)に全面開通した。	日高町史
373	99	広域	1	有形	1	現存	1	産業	7	道路	ルベシベツ(ビタタンク)山道	目黒～広尾	寛政10	1798	幕命で択捉島等を調査した近藤重蔵が悪天候で広尾に何日も足止めにあったので、通行に利便を図るため、自費で広尾町ルベシベツからえりも町ビタタンクまで約3里(11km)を開いた山道(通称重蔵山道)で、北海道最初の道路開設とされる。近藤重蔵は、この時、アイヌの人を苛酷に使役したため、恨みを持って危うく殺されかけたと言われる。また、実際の作業の大半は従者の木村謙次が行ったと言われる。	史跡と名勝、ほろいずみニュース№23、猿留山道の歴史と現状について、北海道の山道等について
374	99	広域	1	有形	3	不明・その他	1	産業	7	道路	根室苫小牧街道(東海岸根室道)	苫小牧～根室	明治16	1883	苫小牧から根室を結ぶ道として名づけて所一に大樫柱が立てたが、ごく部分のみを整備しただけでその他は自然に足跡がついた小道であった。道庁時代になって(国道43号線)に指定され、当時は内陸の開発が未発達で、札幌から道東に至る道はこの道路しかなかったが、海岸の砂地をたどる場合は多く到底道路と呼べるものではなかった。	様似町史、改訂様似町史、新門別町史中巻
375	99	広域	1	有形	3	不明・その他	1	産業	7	道路	幌泉山道	庶野～追分	明治16	1883	庶野追分間を結ぶ山道。現在ほぼ国道366号となっている。	改訂様似町史
376	99	広域	2	無形	1	現存	1	産業	8	その他陸運	日高の自動車交通	—	—	—	寛政年間には駄馬が交通の主役であったが、開拓使時代に鉄輪の馬車が使用されたが、乗用のものは道路が完備していなかったため利用価値も少なく、一般には普及されなかった。大正元(1912)、大塚四郎と中野嘉七の共同経営によって、硬質タイヤの12人乗り大型自動車が静内、佐留太間を運行されたのが日高最初の自動車交通といわれる。大正9(1920)、日高実業協会が5、6人乗りの幌型自動車を購入し日高街道を走らせ、さらに、同年、北日本自動車会社が生まれ小型乗合自動車を購入し、富川から浦河間を往復したが業績が上がらず翌年解散した。大正11(1922)、日高自動車株式会社が設立され乗合バスを運行し、大正13(1924)には幌泉まで運行区域を拡大したが、昭和12(1937)に国鉄日高本線が全通し、昭和18(1943)には国鉄様似自動車営業所が開設されたため事業を縮小し、昭和19(1944)に道南自動車株式会社に引き継がれた。また、昭和2(1927)には、石狩、胆振、日高を結ぶ路線バスとして三国横断バスが運行され、金山～占冠～右左府～仁世年間を結んだが、昭和18(1943)、道南乗合自動車株式会社と合併した。昭和3(1928)には、平取町に日進自動車会社が設立され、平取駅から荷負までの13.3kmに乗合自動車を運行し、昭和7(1932)には、日高町まで定期運転を開始したが、昭和19(1944)には、道南バス株式会社に委譲された。	改訂様似町史、増補改訂静内町史下巻
377	99	広域	2	無形	3	不明・その他	1	産業	8	その他陸運	郵便運送	—	—	—	当初の郵便運送は、郵便袋に鍵をつけ格子型に組んだ木枠を底にした網袋に入れて馬につけ、運送人は思い思いの労働着を着てホンと呼ばれる脚半を履いて馬に乗った。また、別に小さい長方形の郵便袋を下げ客馬車専用のラッパを背負い、郵便物を配達しながら運送した。ラッパは様似山道の通過時や夜間運送時に熊よけに備えたもの。明治29(1896)頃から配達夫が採用され運送と配達分離された。その後、道路が改良され自動車が走るようになると、昭和12(1937)に北海道郵便運送株式会社が一手に請負い、一時中断の後、昭和30(1955)に国営事業として鉄道とバス輸送とに切り替えられた。	増補改訂静内町史、改訂様似町史

番号	コード					名称	所在地	年代		由緒由来の概要	資料名
	町名	有形・無形	現存・非現存	大分類	中分類			和暦	西暦		
378	99 広域	2 無形	2 非現存	1 産業	9 水運・海運	日高の海運	—	—	開拓使以前は、道路事情が悪く、交通も運輸も必然的に海上航路によらなければならず、寛政年間(1789～1800)に幕府が東蝦夷地を直轄するようになってからは、様似の造船所で「赤船」といわれる官船を造船するなど著しく発達した。明治の初期には官有の蒸気船が若干あったが、多くは帆船で、明治4(1871)に稲田旧家臣が移住に使用した船も、日本型船(別名大和船)といわれた金比良丸900トンであった。明治12(1879)には、矢本蔵五郎が西洋型帆船弘済丸(65トン)を建造して、様似～函館間を就航した。明治19(1886)頃、尼崎汽船株式会社の所有船第1日高丸(200トン)が浦河～函館間を就航し、旅客や貨物を運んだ。明治27(1894)に金子忠蔵らが帆船2隻を購入し、静内～函館間を航行し、物資を輸送したのが日高沿岸における回漕店の初めといわれるが、明治37(1904)の日露戦争の際、帆船1隻が轟沈され、明治40(1907)に日高汽船会社が設立されたとともに廃止された。明治35(1902)、函館金森商船株式会社が北海道補助航路を拝命し、函館～大津間往復の途中に浦河に寄港したのが定期航路の始まりであった。明治39(1906)から北海道庁命令補助航路として、函館～浦河～様似～幌泉～広尾～釧路～函館間と函館～幌泉～様似～浦河～三石～静内～函館間の二つの航路が開け、ニヶ崎汽船、千島汽船、金森商船株式会社の船が就航し、月に6、7回巡航していた。明治45(1912)には、一般海運業を目的とした三場所汽船株式会社が浦河町に設立され、三石～浦河～様似～幌泉～函館を連絡したが、所有していた船が相次いで沈没し、大正9(1920)に解散した。大正2(1913)、金森商船株式会社が新たに日高～函館線を開始し、大正13(1924)には昇舞、後辺戸、浦河、様似、幌満、幌泉各港を周る甲線、富川、門別、厚別、新冠、静内、捫別、春立、三石各港を周る乙線を定期航海した。昭和10(1935)ころから、鉄道日高本線の延長に伴って、海上交通は急激に衰えた。	改訂様似町史、増補改訂静内町史下巻	
379	99 広域	2 無形	2 非現存	1 産業	9 水運・海運	縄縄舟(なわとじぶね)	—	1700以前	縄で胴に板を縛り付け、隙間にこけを詰めて作ったといわれる舟で、本州東北地方との交易に使われ、松前から浜づたいに室蘭をとおって日高にたどり着き、砂浜に押し上げ板で屋根をかけ交易の店を開いたといわれる。	日高のれきし	
380	99 広域	1 有形	2 非現存	1 産業	15 人物	高田屋嘉兵衛	—	明和6～ 文政10	1769～ 1827	明和6(1769)、淡路国津名郡志本村生まれ。22歳のとき、摂津国兵庫西出町に回漕店を営み、寛政8(1796)、蝦夷の交易のため所有船「辰悦丸(1500石積)」に乗って函館に来たのが北海道との縁の始まり。寛政10(1798)、函館に支店を設け、それを弟の金兵衛に任せて、自らはエトロフへの航路探索や幕吏間宮林蔵に従ってカラフトへ渡っている。また、寛政11(1799)には近藤重蔵のエトロフ開発に際し、様似から出向して先に見定めていた潮流を利用して無事エトロフに渡り、その成功によって、文化7(1810)に場所請負を命ぜられ、文化13(1816)には根室場所、文政12(1829)には幌泉場所を請負った。文化9(1812)に、ロシア人に捕らえられ、カムチャツカに至った際、日本に幽囚されていたゴロウニシ奉還を約し、韓旋努力したことにより、ロシア人は大いに感謝して、これに報いるために高田屋の船船はいかなることがあっても一切劫掠などしないなどの密約をしたといわれる。弟の金兵衛に家業を譲ってからは、淡路に隠居し文政10(1827)病のために59歳で没する。	三石町史、えりも町史
381	99 広域	1 有形	2 非現存	1 産業	15 人物	山田文右衛門清富	—	文政3～ 明治16	1820～ 1883	山田家は代一文右衛門を襲名し、場所請負人として活躍した。7代目は天明7(1787)に留萌場所支配人を勤め、8代目文右衛門は文政4(1821)に勇払場所を、文政5(1822)には沙流場所を請負っていた。清富は、函館福山城下に生まれ、9代目の養子となり、10代目文右衛門を継ぐこととなる。嘉永5(1852)、勇払、沙流、厚岸、根室の場所請負人となり、漁場開発に努め、カラフトなど数箇所の漁場を開き、また、昆布の発生が乏しかった沙流場所沿岸で昆布投石を行い繁殖に工夫した。慶応3(1867)には、社殿が腐朽した門別稲荷神社社殿等を独力で造営する。明治2(1869)に開拓史が場所請負制度を廃止したあと、清富は勇払に隠居する。	門別町町政要覧資料編、日高のれきし、百年記念写真誌、我が祖山田文右衛門
382	99 広域	1 有形	2 非現存	1 産業	15 人物	田中五郎右衛門	—	安政3～ 大正8	1856～ 1919	福井県南条郡神山村に生まれ、明治17(1884)、浦河村鱒別(現浦河町常盤町)に移住。明治18(1885)、様似山道の道路補修工事に参入し、明治20(1887)には様似山道下、冬島海岸のトンネル開削した。明治23(1890)、浦河村に浄土真宗本願寺派の脱教所を寄進。明治24(1891)には猿留山道下のトンネル、明治25(1892)、ルベシバツ山道下のトンネルを開削し、以後、浦河井寒山道、荻伏昇舞山道の開削等を手がける。	田中五郎右衛門の足跡
383	99 広域	1 有形	2 非現存	5 伝統	15 人物	稲田九郎兵衛邦植 (いなかくにたね)	—	安政2～昭 和6	1855～ 1931	静内町開拓の祖。徳島藩淡路洲本の城代家老として14500石を領する重臣であったが、廃藩奉還によりこれまでの処遇が急落したこと、一方徳島藩側からは朝命である禄制の改革に従わない逆賊として指弾されたこと、戊辰戦争に単独手兵を率いて参加するなどにより徳島藩が反目し、明治3(1870)、ついに徳島藩による稲田家襲撃に至った(「稲田騒動(庚申事変)」。その結果、襲撃の首謀者たちは厳罰を与えられ、淡路は徳島藩領から分離されて兵庫県の管轄となり、同年、九郎兵衛とその元家来に静内移住開拓を命じられた。明治4(1871)、今の元静内に上陸。総勢137戸546人が移住して、静内町と新冠町を支配した。しかし、前増上寺漁場請負人佐野専左衛門から、倉庫、漁具など一切を譲り受けたが、折からの凶凶に加え火災が生じ、倉庫、漁具を焼失したが、皇祖神社、教育所を設けて開墾に努め、新冠郡の増支配を受けたが、同年8月にはすべての支配が罷免され、土地開拓のことも全て開拓使に移管された。西南戦争にあたり、旧臣とともに東京まで出陣し、明治28(1895)静内の不動産を弟邦衛に譲り、徳島県で余生を送る。	増補改訂静内町史上巻、同下巻、続新冠町史、ふるさと探究下、北海道歴史人物辞典
384	99 広域	1 有形	2 非現存	5 伝統	15 人物	シャクシャイン	—	不明～ 寛文9	不明～ 1669	メナシウクルのシベチャリアイヌの長で、寛文8(1668)、以前から静内川沿岸の漁獲権の争奪で対立関係にあったサルンクルのうちハウエウクルと呼ばれていた一人の長であったオニビシを討ち殺した。寛文9(1669)に不正な和人の交易に対して謀反を起こすが(シャクシャインの戦い)、同年、松前の将、佐藤権左衛門の謀計により殺される。	史跡と名勝、浦河町史、門別町史、増補改訂静内町史
385	99 広域	1 有形	2 非現存	99 その他	15 人物	西忠義	—	安政3～ 昭和9	1856～ 1934	安政3(1856)金津生まれで、明治26(1893)に栃木県足利郡長となり、足尾銅山鉱毒事件に関わる。明治34(1901)に浦河支庁長として日高に赴任し、民間有志と図って日高実業協会を組織し、日高国標旗、日高八大政策などを定め、日高開発に努めた。特に馬産については、国立種馬牧場を設置に努め、馬匹輸送上静内橋を架設するなど、日高の馬産地としての基礎を固めた。明治42(1909)に檜山支庁長、明治43(1910)に小樽支庁長となったが、小樽支庁の廃庁により退官した。日高開発の神として神格化され、昭和7(1932)に、浦河神社境内に西神社が建立された。昭和9(1934)に没する。	史跡と名勝、浦河町史、日高のあゆみ、北海道歴史人物辞典
386	99 広域	1 有形	2 非現存	99 その他	15 人物	最上徳内	—	宝暦5～ 天保7	1755～ 1836	宝暦5年出羽村山郡補岡生まれ。26歳で江戸に上り、本田利明に天文、測量を学び、師の代理として北海道に入り巡察した。日高管内には、天明6、エトロフの際に立ち寄っている。寛政11(1799)に近藤重蔵と千島を調査し、その後、猿留山道の開削工事を担当し、長く後世に残すためにも丁寧に工事を行ったが、それに対して財政難などの理由により幕府の反感にあい約1ヶ月程度で解任された。結果、猿留山道はルベシバツ、様似山道とともに格別難儀な道として、悪天候以外はほとんど利用されなかったと言われる。アイヌ語に精通し、アイヌ民族に日本語を教え、最初のアイヌ語辞典を出版した。天保7(1836)、82才で亡くなる。	門別町史、三石町史、北海道の山道等について、北海道歴史人物辞典

番号	コード						名称	所在地	年代		由緒由来の概要	資料名
	町名	有形・無形	現存・非現存	大分類	中分類	和暦			西暦			
387	99	広域	1 有形	2 非現存	99 その他	15 人物	近藤重蔵	—	明和8～ 文政12	1771～ 1829	明和8(1771)、江戸に生まれる。寛政9(1797)に、松前蝦夷地処分と異国取締りに関する意見を若年寄堀田正敦に提出し、使番大河内善兵衛政寿の部下となって蝦夷地を巡察し、寛政11(1799)以降、日高管内にも度一訪れている。ルベシベツ山道を開削したり、比企可満とアイヌの慰撫教化と北辺の鎮護を謀って義経祠を建立し、江戸神田在住の大仏工法橋善啓に作らせた義経像を安置するなどしている。直参の旗本で学者でもあったが、傲慢で専横であったと言われ、様々な逸話が残っている。また、晩年は不遇で、文政12(1829)に幽居中に中風で亡くなる。	門別町史、三石町史、北海道の山道等について、平取町百年記念史跡歴史の散歩道
388	99	広域	1 有形	2 非現存	99 その他	15 人物	伊能忠敬	—	延享2～ 文政元	1745～ 1818	江戸中期の測量家。延享2(1745)、上総国武射郡小堤村生まれ。少年の頃から算数、測量を好みこれを研究し、寛政7(1795)、51歳のとき江戸に上り、その道の名家に教を請うたが、すでにその学識は専門家をしのいでいたといわれる。幕府から警備の必要上、日本各地の直轄地の測量を命じられ、日高支庁管内には寛政12(1800)に訪れ海岸一帯を測量した。文政元(1818)、73歳で没する。	門別町史、三石町史、伊能忠敬略年譜HP、北海道歴史人物辞典
390	99	広域	1 有形	2 非現存	99 その他	15 人物	松浦武四郎	—	文政元～ 明治21	1818～ 1888	文政元(1818)、三重県一志郡須川村生まれ。「北海道」の名付け親として有名で、弘化2(1845)に外国が北方をうかがっているとの風説を耳にして、蝦夷探検のため渡航し、6回(20年)にわたって蝦夷地の内陸部まで探検し、この際、道路の開削、鉱山の発掘、要塞地の選定等を行った。安政5(1858)、6回目の蝦夷地探検で日高支庁管内を訪れている。明治2(1869)には、蝦夷地開拓御用掛の命を受け、開拓大主典として登用され、「道名の儀につき意見書」を提出し、開拓史が北海道名、国名、郡名を選定する際、大きな影響を与えた。明治21(1888)、71歳のとき卒中のため、自宅で没する。	日高町史、門別町史、三石町史、松浦武四郎の人類愛HP、北海道歴史人物辞典
391	99	広域	1 有形	2 非現存	99 その他	15 人物	大河内善兵衛	—	不明	不明	様似会所初代詰合(責任者)で、幕府使番蝦夷地御用掛であった。享和元(1801)近藤重蔵、最上徳内、間宮林蔵、比企可満を随行させ東蝦夷地を巡察し様似に至る。寛政10(1798)には再度訪れ、幕命を受けて山道の開削の指揮監督に当たった。	門別町史、改訂様似町史
392	99	広域	1 有形	2 非現存	99 その他	15 人物	比企可満	—	不明	不明	西丸従目付をもって蝦夷地に出張を命じられ、享和元(1801)に幕府使番蝦夷地御用掛であった大河内善兵衛に随行し、東蝦夷地を巡察した。この途中、近藤重蔵と謀って門別町シノダイに祠を建立し、義経像を安置した。この像は、寛政11(1799)、江戸居住の仏師法橋善啓の彫刻による。	門別町史
393	99	広域	1 有形	2 非現存	99 その他	15 人物	間宮林蔵	—	安永4～ 天保15	1775～ 1844	安永9(1780)、常陸国筑波郡上平柳村に生まれ、幼少の頃から地理学、数学を好んでいた。寛政12(1800)に、幕府の普請役雇となり、蝦夷地に渡って伊能忠敬に測量を学び、享和元(1801)には、大河内善兵衛に随行して東蝦夷地を巡察し、享和3(1803)以後、東蝦夷地、南千島を測量した。文化2(1805)には天文地理御用掛として日高のシツナイに勤務し、文化5(1808)から樺太に渡り海岸線測量に従事し、文化6(1809)に樺太が島であることを発見し、間宮海峡と命名する。その後は異国船渡米の見聞や隠密活動に従事し、天保14(1844)、65歳、江戸の自宅で病死した。	門別町史、間宮林蔵HP、北海道歴史人物辞典
394	99	広域	1 有形	2 非現存	99 その他	15 人物	堀織部正利照	—	不明	不明	安政元(1854)、勘定吟味役村垣範正とともに西蝦夷地を巡検した後、函館奉行となり、安政4(1857)、東蝦夷地巡検の際に日高支庁管内を訪れる。この巡視結果と開拓警備の方法を詳述して幕府に提出したが、幕府による本道の安政年間の経営はこの意見書によるとされている。	門別町史
395	99	広域	1 有形	3 不明・その他	5 伝統	16 民話・伝説等	オキクルミカムイ	—	—	—	人間の生活に必要なことを教示するアイヌの祖神で、平取町に降臨したといわれる。雷鳴を発する力がある「サマウングル」という従者を伴っているとの事から、この話を聞いた和人が「オキクルミ」は内地からこの島に渡った判官義経で、「サマウングル」は弁慶であると吹聴したといわれる。シュウムングル(西方人)では最高神とされているが、メナシウングル(東方人)では「サマウングル」とは反対の立場となっている。	史跡と名勝、平取町史、門別町史、続新冠町史
396	99	広域	1 有形	3 不明・その他	5 伝統	16 民話・伝説等	サマイクル	—	—	—	メナシウングル(東邦人)の最高神で、義経をこれを当て、「オキクルミ」は大飯食いの力持ちの乱暴者として弁慶を当てて言い伝えられている。シュムウングル(西方人)とは立場が反対となっている。	続新冠町史
397	99	広域	2 無形	1 現存	5 伝統	16 民話・伝説等	柳葉魚(ししゃも)の伝説	—	—	—	貧しい村人を助けるため、ふくろうの神が柳の葉を魚にした。	門別町開基120年記念誌
398	99	広域	2 無形	1 現存	5 伝統	16 民話・伝説等	シュウムングル(西方人)	—	—	—	日高地方アイヌ民族の西方系祖先伝説。トカブチウングル(十勝人)が盗人として談判をつけられたため、6人の子供と賈子1人を連れて山越えをして、それぞれ静内や各地に散らばったことにより、十勝者が日高に広がったといわれる。オニビンが代表的首長。	増補改訂静内町史上巻、続新冠町史
399	99	広域	2 無形	1 現存	5 伝統	16 民話・伝説等	ハエウングル(波恵人)	—	—	—	西方系のアイヌ民族。十勝から沙流川の上流に入り、荷負・平取を通過して波恵にきた5人兄弟の子孫で、このうち2人が静内に来たが後は新冠と厚賀に留まったといわれる。サルアイヌがこれに入るといわれる。	増補改訂静内町史上巻、続新冠町史
400	99	広域	2 無形	1 現存	5 伝統	16 民話・伝説等	メナシウングル(東邦人)	—	—	—	日高地方アイヌ民族の東方系祖先伝説。昔、東の方の国から北海に浜に出て、嵐に吹き流され、日高海岸に住むようになったといわれる。シャクシャインが代表的な首長。	増補改訂静内町史上巻、続新冠町史
401	99	広域	2 無形	1 現存	5 伝統	16 民話・伝説等	日高の名の由来	—	明治2	1869	「日高」の語源をたどると、直接的には北海道探検で知られる徳川幕府御用雇松浦武四郎、間接的には「日本書紀」に到達する。由来1 維新政府が国郡を設定する際に、松浦武四郎が「土地が南向きで霞なども早く晴れ、天日を早く仰ぐことができるため日高はどうか。」と建言した。由来2 日本書紀、景行天皇の27年の条に「東夷之中」に「日高見国」というところがあり、松浦武四郎はこの名を使用した。	新門別町史上巻、続新冠町史、日高町史

番号	コード						名称	所在地	年代		由緒由来の概要	資料名
	町名	有形・無形	現存・非現存	大分類	中分類	和暦			西暦			
402	99 広域	2 無形	1 現存	5 伝統	16 民話・伝説等	義経伝説	—	—	—	—	寛文10(1670)、幕府の儒学者林春斎がその著書「本朝通鑑」で、また、享和5(1720)、新井白石が「蝦夷志」で、義経が北海道に渡ったという説があると述べたことなどにより、真実のように信じられるようになったといわれる。 また、室町時代の御伽草子の一つ「御曹子島渡り」という話に「義経が蝦夷が島へ渡って、そこの大王の娘の助けを借りて秘法を写し取り、それを使って源氏の世を作る」というものがあり、この話が影響していると考えられる。 さらに、幕府が蝦夷地管理に乗り出した際、アイヌ民族を隷属させる道具として「義経=アイヌ民族の英雄オキクルミ」という説を積極的に利用した。その内容は、「自刃を装って落ち延びた義経らは、もっぱら間道を通って旅を続け、津軽半島の北端から蝦夷ヶ島鶴山に着いた。そこから海岸沿いに木古内、上磯を経て函館に出て、さらに北上して七飯から大野、乙部より海路で寿都に向かった。それより尻別、羊蹄山から洞爺、支笏湖、千歳、鶴川を経て日高にたどり着いた。サルフトに入って情勢を見るとサルアイヌは当時日高の中心勢力であったため難いと感じて門別、厚別、節婦を経て新冠に至り、ここに館を建てて付近のアイヌを従えサルの大勢をうかがった。やがて、判官館の城跡を後に節婦、厚別、賀張、慶能舞、波恵、山門別を経てハヨヒラ(平取)にたどり着いた。サルアイヌとは和解し、耕作のことを授け、若者の訓育を行い、舟の操法や、機織などを教えたので人へは判官様として崇拜した。やがて、訓育した若者たちをひきつれ大陸遠征に向かった。」といわれる。	史跡と名勝、門別町史、北の生活文庫7北海道の口承文芸
403	99 広域	2 無形	1 現存	5 伝統	17 祭事・芸能	アイヌ古式舞踊	—	—	—	—	アイヌ古式舞踊は、北海道各地に居住しているアイヌの人へ、古来より家族や集落(コタン)の祭祀やさまざまな行事の祝宴に際して踊られ、大切に伝承されてきた歌と踊りからなる芸能。 これらの歌舞には、祭事のための酒作りの際に歌われる「杵搥き歌」や「ざるこし歌」に合わせて踊る作業歌舞、祭祀的に性格の強い「剣の舞」や「弓の舞」のような儀式歌舞、「鶴の舞」、「バツの舞」、「雨燕の舞」のような擬態舞踊、「棒踊り」や「馬追い歌」のような娯楽舞踊などの種類があり、地域によって伝承曲目や舞い方は異なるが、いずれも歌(ウボボ)と輪舞(リムセ)で構成されている。 このアイヌ古式舞踊は、アイヌ独自の信仰に根ざしており、その様式には古い形態をとどめるものが多いといわれている。特に、信仰と芸能と生活が密接に結びついているところに特徴があり、芸能史的な観点からも価値が高く、信仰あるいは生活の中から生まれた舞踊性を色濃く伝えていることから、舞踊の発生を考える上でも重要であるといわれている。 そのため、昭和59(1984)に国の重要無形民族文化財に指定され、その保存団体として、旭川市、白老町、平取町、静内町、浦河町、帯広市、釧路市、阿寒町の8市町による保存会により構成された「北海道アイヌ古式舞踊連合保存会」が指定を受けた。平成6(1994)には、札幌市、千歳市、鶴川町、門別町、新冠町、三石町、様似町、弟子屈町、白老町の9市町の保存会が追加指定された。 日高支庁管内の指定団体 昭和59指定 平取アイヌ文化保存会(平取町)、静内民族文化保存会(静内町)、浦河ウタリ文化保存会(浦河町) 平成6指定 門別ウタリ文化保存会(門別町)、新冠民族文化保存会(新冠町)、三石民族文化保存会(三石町)、様似民族文化保存会(様似町)	浦河町立郷土博物館資料
404	99 広域	1 有形	1 現存	5 伝統	18 工芸・美術	日高地方の土器	—	—	—	—	日高地方に見られる最も古い形式の土器は平底土器で、縄文前期に入って北海道東部の色彩が強い尖底土器文化が盛行した。 中期に入ると筒形土器文化が一般的となり、日高地方は奥羽地方と同一文化圏を形成しながら生長変遷していった。後期から晩期にかけては土器の形も著しく多様化し、日高は関東地方から北海道南西部を含む大きな文化圏に入っていた。 しかし、北海道東北部地方は、本州の縄文文化に見られない外縁的な性格をもった文化が生成されていて、それがしばしば日高山脈を越えて日高地方に入り、独特な土器形式を発生させた。また、縄文前期2世紀頃、本州で弥生式文化が発生し、しだいに北上したが、北海道ではなお「縄文文化」と呼ばれる縄文文化の生活を受け継いだ。この文化は金属器が伝来が新しい要素となり、その本州の古墳文化の影響を受け、しだいに擦文土器に移行した。 鎌倉時代から室町時代になると擦文文化は消失し、土器は鉄銅や漆器に変わり、いわゆるアイヌ文化が成立した。	日高の文化財第1集(埋蔵文化財編)
405	99 広域	2 無形	3 不明・その他	99 その他	21 事件・事故	シャクシャインの戦い(寛文九年蝦夷の乱)	—	寛文9	1669	—	戦いの発端は、メナシクル、シベチャリ(静内)の長シャクシャインとハエ(沙流)の長オニビシの間における静内川沿岸の漁猟場の争奪にあり、ついには不正な和人の交易に対する抵抗となって発展し、北海道アイヌ騒動中最も大きなものであった。 当時、メナシクルは静内川左岸にチャシを築き、対岸のハエウクルの長オニビシと対立していたが、あるときメナシクルの長カモクタイがオニビシらの襲撃に合って討ち殺され、その後を継いだシャクシャインは仇敵オニビシを討つために闘争を繰り返していった。 承応2(1653)に松前藩は、家臣佐藤権左衛門らを派遣し両者を説得して和睦させたが、寛文6(1666)から小さな騒ぎが始まり、寛文7(1667)には、鶴の捕獲の是非について口論の末、オニビシ一族の若者をシャクシャインの息子ツコホシが討ち殺す事件が発生し、さらにシャクシャイン一族はオニビシらを殺害した。 オニビシ一族であった波恵のチクナシ、ピボク(新冠)のハロウ、沙流のウトウなどが仇敵を討つために戦ったが、ついにアツベツのチャシでシャクシャイン一族に敗れ、沙流のウトウは、復讐のため、松前に行きつて松前藩に兵器や食糧の援助を求めたが拒絶され、その帰路、野田追というところで病死した。 寛文9(1669)、シャクシャインとオニビシ一族の争いは、松前藩の仲裁によって一応収まったが、シャクシャインは松前藩からどのような制裁があるか不安にかられ、さらに当時シベチャリには4人の鷹待がおり、シャクシャインと組んで通商の利益を取るため、松前藩を滅ぼそうと画策していたといわれ、シャクシャインは、沙流のウトウが死んだ理由を松前藩に毒を盛られたこととしてオニビシ一族を恨み、さらにアイヌを皆殺しにするようだという噂を流した。 以前からの和人に対するアイヌ民族の不信任と不満(自由交易の制限、不当な交易価格の強制等)が爆発し、サルアイヌは恩讐を越えてシャクシャインと同盟し、東西各地のアイヌとともに蜂起して、約350余の船頭、水主、金堀などを殺戮するに至った。 シャクシャインは、松前を落とそうと国縫までせまってきたが、松前藩の砲火に一蹴され、その後、松前藩は再び侵襲をはじめ、多数の「償い」を徴収し、アイヌの長たちを一斉に捕らえた。 また、軍使をシベチャリに遣わしてシャクシャインに投降をすすめたが、シャクシャインは釧路地方に退いて数年でも抵抗を続ける方針を定め、再び自由なアイヌ民族の天下を作る計画であったので、松前藩は、釧路まで追いつめられ、捕縛できなくなるため、敵味方区別なしにアイヌを皆殺しにすると同様に、場合によっては命は助けるとの謀略を用いたところ、シャクシャインの息子カンリリカが父をいさめて降伏させた。 寛文9(1669)、シャクシャイン達は武器や鎧をつけて松前陣営に臨んだところ、松前藩は佐藤権左衛門に命じて武装を解除させ、16名を招き和議を祝すと称して酒を与え、酔ったところを討ち殺してシベチャリのチャシ(岩)を焼き払った。 この結果、アイヌ軍の敗北で終わり、この後、松前藩のアイヌ民族に対する政治的・経済的支配が一層強められた。	平取町史、門別町史、増補改訂静内町史、北の生活文庫1北海道民のなりたち
406	99 広域	2 無形	3 不明・その他	99 その他	21 事件・事故	千珠丸の油害事件	—	昭和6	1931	—	幌泉の歌露海岸に座礁した千珠丸が強風にあおられ中央部から折損し、クレオソート、燃料重油など1,200トンが流出した。この油が海岸に沿って次第に移動し襟裳岬を越え、西は冬島から様似に及んだ。 沖合い二海里に渡って魚類は死に、海藻類は完全に死滅したため、漁民達は生業が成りたくなり、沖合漁業への進出、有畜業への転換など多角経営のきっかけとなった。	改訂様似町史

番号	コード						名称	所在地	年代		由緒由来の概要	資料名			
	町名	有形・無形	現存・非現存	大分類	中分類	和暦			西暦						
407	99	広域	2	無形	1	現存	1	産業	99	その他	日高の電信、電話	—	明治8～ 1874～	明治8(1874)に浦河郵便取扱所が開設され、明治17(1884)に日高路を通過して根室に至る電信線が架設された。同年、浦河幌泉に電信取扱所が開設され、電信事務が取り扱われた。その後、門別、下下方、三石、秋伏、新冠の電信局や郵便局でも電信が扱われるようになった。大正4(1915)に浦河町に電話が設置され、電話通話や呼び出し事務が開始された。大正8(1919)には浦河郵便局で、通話事務、交換事務が開始され、当時電話加入者は38名であった。	浦河町史下巻
408	99	広域	2	無形	3	不明・その他	1	産業	99	その他	日高振興八策	—	明治35 1902	当時の浦河支庁長西忠義が、行政上の一機関、内外問題諮問画策の府として創立した日高実業協会の指針として創案したもの。「一、教育増進、二、交通開展、三、産業奨励、四、疆土拓殖、五、戸口増進、六、町村経営、七、衛生保健、八、風紀振興」	日高今昔叢誌
409	99	広域	2	無形	3	不明・その他	1	産業	99	その他	日高国標銘	—	明治35 1902	当時の浦河支庁長西忠義が、日高実業協会の指針として日高国標識とともに作成した銘文。「日高国標銘 北海之開、日高最旧、七郡一州、資産頗富、黄壤豊肥、斯適耕種、蒼海波平、每饒漁收、驥嘶長風、魚躍雲竇、紅旭照一、耀于宇宙、非有夭祐、豈得如斯、古人命名、良有以思、夙夜欽仰、以標國旗、永傳不朽、隆昌矣疑」	日高今昔叢誌
410	99	広域	2	無形	3	不明・その他	1	産業	99	その他	日高国標識	—	明治35 1902	当時の浦河支庁長西忠義が、日高実業協会の指針として日高国標銘とともに創案したシンボル図案。「日高国標の太陽は、日高に因みて、国の勢気を示し、光線7線は7郡に象る、太陽の下は寿の字の古篆体を覆して、水、土となしたり是れ日高天地の長久と海陸資産の豊穰とを壽きたるものなり」	日高今昔叢誌